

奈良民医連

東日本大震災支援ニュース No.26

2011.04.20 奈良民医連震災対策本部



現地支援レポート（井上清文さん）の 続きです。

4月16日～19日に支援参加されたさくら診療所の井上清文さんからの現地レポートです。（抜粋）

さくら診：井上清文

（2日目）

今日は7:50集合で、地震で使用不能になった、長町病院の門前クリニックの片付けに行きました。

19名で、ひたすら力仕事のようです。ヘルメット、軍手持参で、筋肉痛は覚悟だそうです。

長町病院は、坂総合病院と同じく、病院の向かいに旧病院があり、それがクリニックとして小児科以外の外来がありました。その旧病院が、地震で増築部分がずれ、建物として使用不能になり、丸ごと潰すしかないという状況だそうです。そのクリニックから、使えそうなものやカルテなどを別の倉庫へ移す作業を行いました。

スチールの事務机から待合の長椅子、職員のロッカーにソファーなど、大量にありました。それを4階とかから降ろすのですが、やはり停電しているのでエレベーターは使えず、狭い暗い階段をひたすら運びます。

午後からは分かれて作業をしました。私は使えなくなった電子カルテの端末やモニター、プリンタ、ケーブルなどを別の倉庫へ移す作業をしました。サーバはクリニックに置いてあったそうですが、坂総合病院にも3次バックアップサーバがあり、長町病院では自家発電で電子カルテがそのまま使用することが出来たようです。

終わってから、初日の人を連れて帰り道に津波のすさまじい被害に遭った、仙台市若林区を通過のことだったので連れて行ってもらうことになりました。

仙台市若林区は、仙台駅から少し南の東の海岸沿いで、津波で数百人が亡くなられたところです。

津波の実質上の防波堤となった、東部道路という盛り土の有料道路をくぐった途端、それまでとは全く違う光景が目に飛び込んできました。

田んぼはガレキに覆われ、ところどころに流された車が散乱しています。

そして、海岸沿いに近づくにつれ、状況はさらにひどくなりました。

家がなくなっているのです。

家があるはずの場所から、家がなくなっているのです。

残っている家も、一階は殆どなくなっており、向こう側が見えていました。

そして、そんな光景があたり一面、ずっと続いているのです。

言葉を無くしました。寒気がしてきました。



もちろん、似たような光景はテレビで幾らでも見てきました。みなさんもそうだと思います。

しかし、目の当たりにすることがこれほど衝撃的なものかと思いました。

西の向こうのほうでは、仙台市のビル街が摩天楼のように夕日に写っていました。

そして日の前には、家も土地も車も田畠も生活も、そしてたくさんの命をも奪い、何も無くなった光景が広がっています。



津波が来たところと、そうでないところでは、これほど違うものかと改めて思い知らされました。その後帰りの車では、疲れがどっと出て、気力がなくなりました。

仙台市若林区の写真を添付します。

(3日目)

5時過ぎには目が覚めるものの寝不足感が残る朝です。

避難所にいる方もこういう辛さがあるのかと思うと、負けないと、という思いが湧いてきました。

三日目の今日は避難所訪問ということで、ようやく人に接する支援になりました。

行くことになった避難所は多賀城市総合体育館というところで、坂総合病院から歩いていける距離に440名の方が避難されていました。

そこで医師・看護師は医療チームとして診療を担当し、セラピストは単独でリハビリ支援に入り、コメディカル、介護職、事務はフットケアをすることになりました。体育館の前には、自衛隊の支援でお湯の配給がされており、我々はそこからお湯をもらってフットケアを行なうことになりました。足浴などもちろんしたことはなかったのですが、ぶっつけ本番でさせてもらいました。まずお湯を入れ、ちょうどいい温度に調節後、入浴剤を入れて足をつけてもらいます。

温まってもらっている間に、手にハンドクリームを塗りながらマッサージをします。

それが終わると、足を洗います。ケガや変色、むくみや爪の状態をチェックしながら、指の間まで丁寧に洗っていきます。

その間に、お話をします。

東北の方は、あまり自分から話されないそうですが、話しかければいろいろ話してくださいました。ただ、誰もが、いわゆる九死に一生を得たというような話でした。

避難所で暮らしているのだから勿論家が津波の被害に遭った方ばかりなのですが、生々しい地獄のような話でした。1階が津波の被害にあった方がほとんどで、首まで浸かって壁にしがみついて助かった人や、2階に上がって3日間飲まず食わずに救助を待った人、助けた人が低体温症で心肺停止になった人など、どれも信じられない体験を話してくださいました。

スタッフは、とにかく心を楽にしてもらおう、お風呂に入れない分温まって疲れを癒してもらいたい、という想いで、県連も職種も超えた素晴らしいチームワークで途切れないと利用者さんにはっこりしてもらいました。ちょうど入浴剤が切れたところで、さくらのスタッフが集めてくれた入浴剤を持って行ったので、大活躍でした。

一日目や二日目のような、汚れ作業や裏方と思っていたので、とても素晴らしい経験になりました。何より、未熟なフットケアでしたが、それでも自分が直接的に何かをすることで人に喜んでもらえる、という経験は、事務として10年やってきて初めての感覚だったような気がしました。

1ヶ月が過ぎ、ようやくあの当日の出来事を改めて思い返すことが出来るようになった方が多く

なってきたようです。そして、それは坂総合病院を始めとする地元の支援スタッフにも言えることです。

そういう方々への、医療の枠を越えたきめの細かい迅速なフォローが、民医連なら全国の連帯で出来ると思います。少なくとも、三日間一緒にすごした、全国各地からのスタッフはそういう想いでいたと思います。誰もが、自分の専門、得意分野を生かし、役割を分担し、支え合い、問題意識を共有し、次に生かす、次に伝える、出し惜しみをしない、という雰囲気でした。

(最終日のレポート&まとめのレポートです。)

8：30からの全体ミーティングに参加し、昨日まで一緒に今日以降も引き続き支援に入る、顔見知りになった幾人かと別れ挨拶をし、自然と硬い握手を交わしました。同じ釜の飯を食うような連帯感があり、少し寂しい感じです。

全日本の責任者や、現地の本部スタッフにも知り合いがいたので声をかけました。今日で、述べ支援者が一万人、義捐金は2億円を超えるそうです。現地のスタッフは、自身も被災者の身であるので、あまり力を入れ過ぎず長い目で復興していきます、とおっしゃっていました。

今日の支援者を送り出した後で、初日の友人が、多賀城から七ヶ浜の津波に遭った地域を車で案内してくれました。

多賀城の辺りは、津波にのまれたというより、じわじわと水かさがあがっていき水没したという地域でした。建物は比較的残っているのですが、それでも1メートル以上の津波で車ごと流されたり高いところに逃げられずにたくさん的人が亡くなりました。

七ヶ浜から塩釜のあたりで決壊した川には、海から流されてきた船が大量に残されており、中には道路の上に打ち上げられた船もあり、そのまま手つかずの状態でした。

道路の脇には大量の瓦礫や土砂が積まれており、ダンプカーが何度も往復していました。

地元の人にとっては、見慣れた光景があまりに様変わりしている光景は衝撃以外のなものでもないようでした。

仙台駅を降りると、それまでの非日常から日常に戻ってきた感じがし、少し力が抜けた気がしました。仙台から福島まで在来線に乗り、そこから新幹線で東京を通り帰りました。

いま、改めて思うことを言います。

東北には、これからも長い、長い支援が必要です。

それは、民医連だからとか、坂総合病院のある地域だからとかではなく、全体的なことです。

民医連の力にも限界があります。何より、それはあくまで私的な有志による支援であり、やはり公的な支援が速やかに、隅々まで行き届く必要があります。

様々な連携をとりながら直接的な支援をしつつ、一方で現場からの声で公を動かしていく、そういう視点で支援していくことが大切なのだと思います。

そして、出来るだけ多くのみなさんにも、直接的な支援に参加してもらいたいと思います。

行ける人が行き、行けない人は現場を守り、行った人は自分の目と耳と肌で感じ、求められていることを精一杯実行し、次の人にバトンを渡し、帰ってきてみんなで共有する、そういう事かなと思います。

最後に、現地のスタッフから、全国の支援者へのメッセージを一つ紹介したいと思います。

「震災の直後から、全国からみなさんが支援に来てくれました。たくさんの方の力が支えになりました。民医連ってステキだなって、改めて思います。ありがとうございます。」

今の私の気持ちも、難しいことを言わずにまとめるところのメッセージに等しいです。

民医連って「ステキ」だと改めて思います。